

アラビア語チュニス方言における主題化

熊切拓

cyberbbn@gmail.com

キーワード：アラビア語 マグレブ方言 統語論 主題化 語順

要旨

本稿では、アラビア語チュニス方言の主題文の記述を行った。この言語においては主題は、評言の前に出るという語順に関わる特徴と、評言内において代名詞や人称接辞などとして再述されるという2つの統語的特徴を持つ。さらに、この言語の主題化の顕著な特徴として、統語的・形態的な制約が弱くさまざまな要素が「自由に」主題となりうることをあげ、この自由な特徴を話者の主観性と関連づけて論じた。

1. 導入

1.1. 本論文の概要

本稿では、アラビア語チュニス方言における主題を取り上げ、いかなるものがどのように主題化されるのかについて統語的な観点から記述を行う。まず、「1. 導入」においては、本論文の概要を述べたのち、対象となる言語、資料についてまとめる。「2. チュニス方言の主題化」においては、この言語の主題の特徴について述べたのち、名詞文と動詞文のそれぞれの主題化の例を記述し、さらに二重の主題を持つ文の例もあげる。「3. チュニス方言の主題化の特徴」では、前節での記述を踏まえて、この言語の主題化について分析する。最後の「4. 結論と課題」では本稿の結論と今後の課題について述べる。

1.2. 言語の概略

アラビア語チュニス方言は、北アフリカのチュニジア共和国の首都、チュニスで話される言語であり、マグレブ方言の1つである。子音音素は以下の30種である (IPAに準ずる)。
/b, m, f, θ, ð, ð̣, t, ṭ, d, ḍ, n, s, ṣ, z, r, ṛ, l, ḷ, ʃ, ʒ, k, g, x, ɣ, q, h, ʕ, h, w, j/。母音は /i, a, u/ 及びその長母音 /i:, a:, u:/ の6種である。

この言語の文法の概略を記す (より詳しい記述はGibson 2009に見られる)。名詞には男性・女性の2つのクラスがあり、単数・複数の区別も形態的になされる。格の標識がないため、格関係は主として語順によって表される。ただし、次ページの表1に示したように人称接辞には、モダリティ辞などに接尾される主格人称接辞、動詞に接尾される対格人称接辞、名詞や前置詞に接尾される属格人称接辞の3系列が存在する (表中において、スラッシュの右側にある形式は子音に接尾する場合のもの)。動詞は人称・数によって活用する

が、3人称単数形にのみ男女の区別がある。動詞の活用には完了形、未完了形、命令形（ただし肯定のみ）の3系列がある。

表1 チュニス方言の人称接辞

		主格	対格	属格	
単 数	1人称	-ni:		-ja:/-i:	
	2人称	-k/-ik			
	3人称	男	-hu:, -u:	-h/-u:	
		女	-hi:, -i:	-ha:	
複 数	1人称	-na:			
	2人称	-kum			
	3人称	-hum			

1.3. 資料

本稿で用いる資料は、2001年から2017年までの間に筆者が、以下にその名を記す2人のチュニス方言話者を対象として行った語彙的・文法的調査に基づく。これにはチュニス方言による4巻本の物語集（Al-ʕArwi:, ʕAbd-al-ʕazi:z [1989] *hika:ja:t al-ʕarwi:.* Vol. I-IV. 2nd ed. Tunis: Al-Da:r Al-Tu:nisi:ja li-l-Naʕr.) に関する調査も含まれるが、それはアラビア文字で記されたテキストの音韻を確定し、および語彙と文法を理解する上で、当該言語話者の協力が不可欠であるからである。本稿においては最初の2巻から多くの例を採用しており、第1巻では Ouacel Krir 氏（40代男性、チュニス生まれ）、第2巻では Farouk Herzi 氏（40代男性、ガルディマウ生まれ、チュニス在住25年）に協力いただいた（引用にあたっては巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で示した）。この場を借りて両氏には感謝を申し上げる。

2. チュニス方言の主題化

2.1. 語順の概略

主題化について論ずる前に、この言語の語順の概略を示す。この言語には大きく分けて、名詞的要素が述部となる名詞文と、動詞が述部となる動詞文との2つの文のタイプが存在する（ただし、(31) で扱うようなモダリティ要素が述部となる文も存在する）。名詞文は主語（S）に動詞の含まれない述部（P）を後続させたものであり、一般的に (1) のような構造で表すことができる。その具体例は (2) である。

(1) S P

(2) ha:ði: da:r-i:
これ 家-私の

S P

「これは私の家だ」 [I-126]

次に、動詞文について述べると、主語 (S) は動詞 (V) の後に現れる。

(3) dxal l-aʃru:s la: kla:m la: sla:m
入るPERF.3SGM DEF-新郎 NEG 言葉 NEG 挨拶

V S

「新郎は一言も言わずに入ってきた」 [I-011]

一方、この言語はいわゆるプロ・ドロップな言語であり、主語は文において必須な要素ではない。主語が現れない場合は、Vのみとなるが、これに目的語 (O) が加わると、その語順はVOとなる。

(4) jilqa: rʔa:zil
見つけるIMPF.3SGM 男

V O

「彼は男を見つけた」 [I-211]

そこで、主語と目的語が同時に現れる時の語順をみると、(5) のVSOと (6) のVOSのふた通りがある。

(5) nahħa:t hi:ja hwa:j3-ha:
脱ぐPERF.3SGF 彼女 衣服-彼女の

V S O

「彼女は服を脱いだ」 [I-011]

(6) ʃassla:ma za:rit-na: l-barka
こんにちは 訪問するPERF.3SGF-私たちを DEF-祝福

V O S

「こんにちは、祝福が私たちのところにやってきました (=ようこそいらっしゃいました)」 [I-121]

いずれの例も動詞の直後にくるのは人称代名詞や人称接辞という代名詞的な要素である。すなわち、主語か目的語かという文法的役割によって語順が決まるというよりも、主語であれ目的語であれ、代名詞的要素のほうが動詞の直後にくるといえる（上の (5)、(6) の例においてこの代名詞的要素を太字で示した）。これは、直接目的語ばかりでなく、前置詞に導かれた間接目的語でも同様であり、その補語が普通名詞などではなく人称接辞である場合には、動詞の直後に現れる（下の (7) では該当する要素を太字で示した）。

- (7) firhit **bi-ha:** l-mrfa:
 喜ぶPERF.3SGF ~に-彼女 DEF-女
 「女は彼女に喜んだ」 [I-214]

主語と目的語のどちらもが普通名詞である例は非常に少ないため、本稿で用いた資料からはVSOとVOSのどちらの語順が一般的なのかはつきりと決めることはできないが、次の定型文的な例においてはVSOとなっている。

- (8) ʒmaʃ rabb-i: ʃaml-hum
 集めるPERF.3SGM 主-私の まとまり-彼らの
 V S O
 「我が主が彼らを再会させた（文字通りには『彼らのまとまりを集めた』¹⁾）」 [I-066]

(3) から (8) までの例をもとに、動詞文の構造についてまとめると (9) のようになろう。直接目的語と間接目的語はともに動詞補語 (COMP) としてまとめてある。

- (9) V S COMP もしくは V COMP S

Vに続く部分の主語と動詞補語の順序であるが、どちらかが人称代名詞・人称接辞の場合はその方が先になり、どちらも普通名詞の場合は主語が先になる。

2.2. チュニス方言の主題の統語的特徴

主題化とは、ある構造を持った文を「主題の部分とそれ以外の部分の2つから構成される構造」（野田 1994: 50）に転換することであり、ここで主題をT、それ以外の部分を評言 (C) と呼ぶことにすると、主題化によってできた構造は (10) のように表される。

- (10) T C

¹⁾ ただし、これは古典アラビア語的な言い回しでもあるようだ (Hava 2001: 377)。

この(10)に示したように、主題は評言の前に現れるのが普通である。こうした語順的な特徴に加えて、日本語の「は」のように、特定の主題標識で主題化を行う言語もあれば、そのような標識を持たずに統語的な手立てによってこれを行う言語もある。本稿で扱うチュニス方言はこの後者である。すなわち、この言語には主題を示す特別な形態的標識はなく、もっぱら次の2つの統語的特徴によって主題化がなされる。

まずその1つは、上で述べた、主題が評言の前に現れるという語順的な特徴である。もう1つの特徴は、主題が評言内部において占めるべき統語的機能を、その主題に一致する代名詞的要素（人称代名詞、人称接辞、動詞屈折辞）が再び現れて代行するというものである。主題が評言内において再び現れることを、本稿では主題の再述と呼ぶことにし、主題と再述された代名詞的要素との関係を再述関係と名付ける。そこで、統語的にはこの言語における主題は(11)のようにまとめられる。

(11) チュニス方言の主題の統語的特徴：評言の前に現れるという語順的特徴と主題の再述

こうした観察が妥当かどうかは、個々の例を見たのちに3.1において検討する。

2.3. 名詞文における主題化

ここでは、名詞文における主題化についての記述を行う。

先に述べたように名詞文は(1)という構造を持つ。こうした構造全体を評言とし、その前に主題が現れる場合、その主題は、評言内部のSかPのどちらかにおいて人称接辞として再述される。(12)の主題 *ahna*: 《私たち》はPである *sibr* 《しきたり、やり方》に接辞された1人称複数の属格人称接辞と再述関係にある（この再述関係を太字で示す）。

(12) *ahna*: *hakka*: *sibr-na*:

私たち これ しきたり-私たちの

「私たちについていえば、これが私たちのしきたりだ」[I-099]

次の(13)と(14)では主題とSに付された属格人称接辞との間に再述関係が成立している。

(13) *ha:ða:ka* *qisʰsʰt-u*: *qisʰsʰa*

あの(者) 物語-彼の 物語

「あの者についていえば、彼の物語は物語だ（すなわち、『彼の身の上にはある事情がある』の意）」[I-121]

(14) **inti:** **ka:r-ik** **ws'i:fa**
あなた ふさわしいこと-あなたの 黒人の女奴隷

「あんたについていえば、あんたにお似合いなのは黒人の女奴隷よ」 [I-057]

これらの主題をもつ名詞文の構造は (15) のように表せよう。なお、本稿では角かっこ ([]) は句・文・構文の構造を示すものとする。

(15) T C [S P]
 ただし、TはS・Pのいずれかと再述関係にある。

2.4. 動詞文における主題

(11) に定義された主題は、動詞文においても観察することができる。まず、主語が主題となっている例を見る。

(16) **inti:** **ts'addiq** **in-nsa:**
あなた 信じる IMPF.2SG DEF-女たち
 「君は女たちを信用している」 [I-115]

これをSV語順とみなすこともできるが、文頭の2人称単数の人称詞 **inti:** に一致する人称要素が動詞屈折辞として再述されているとみれば、**inti:** を主題として解釈することができる。この後者の解釈を支持するのが、次の (17) の例である。

(17) **w-l-mr'a:** **mfa:t** **ʃla:-nifs-ha:** **hi:ja** **w-wla:d-ha:**
そして-DEF-女 行く PERF.3SGF ~で-自身-彼女の 彼女 そして-子どもたち-彼女の
 「そして、女は子どもたちとともに自分で (どこかに) 行ってしまった」 [I-023]

評言となっている **mfa:t** 以降の部分についてまず述べると、この言語では「AとBとCが～した」という形で複数の主語を列挙するとき、動詞は一番最初に現れた主語と一致する。この (17) では、動詞と動詞補語である前置詞句の後に現れた二つの主語 (**hi:ja w-wla:d-ha:** 「彼女とその子どもたち」) が意味的には行為主であると考えられるが、動詞は3人称複数形 **mfi:w** もしくは **mfu:** とはならず、最初の主語 **hi:ja** 《彼女》とだけ一致している。すなわち、(17) の動詞 **mfa:t** の主語は **hi:ja** なのであり、ここで、動詞の前の定名詞 **l-mr'a:** 《その女》を主語であると解釈すると、この文には動詞の前後に **l-mr'a:** と **hi:ja** という2つの主語が存在するということになってしまう。これはかなり変則的な事態となるが、この **l-mr'a:** を主題とみなせば、これと動詞 **mfa:t** との関係は、主語とこれに一致した動詞

との関係ではなく、主題の再述関係であると考えることができ、動詞と主語との対応は *mfa:t* と *hi:ja* に割り当てられ、構造的な矛盾は解消される。

次に、動詞の直接目的語が主題化されている例について述べる。いずれの例でも、主題と動詞に接尾された対格人称接辞とが再述関係にある。

- (18) *il-bnajja:t* ʔfi:t-hum *l-kull*
 DEF-娘たち 与えるPERF.ISG-彼女らを DEF-すべて
 「娘たちはといえば、私はみんな嫁にやった」 [I-216]

- (19) *w-l-qasʕba* ʔumrʕ-i: *ma:-nfa:riq-ha:*
 そして-DEF-竹 決して-私 NEG-離れるIMPF.ISG-それを
 「そして、竹の杖はといえば、私はそれを決して手放さない」 [I-164]

直接目的語ばかりでなく、前置詞を介して動詞目的語となっている間接目的語も主題化されうる。(20) は前置詞 *-l-* 《〜に》、(21) は ʔla:-ʔli:- 《〜に対し》、(22) は *min-* 《〜から》、(23) と (24) は *fi:-* 《〜の中に》に付された属格人称接辞として主題が再述されている（なお、前置詞 *-l-* 《〜に》は、他の前置詞と異なり、属格人称接辞が付された場合に限り、動詞に接尾される）。

- (20) *w-mu:la:t-tʕʕa:bu:na* *qu:l-l-ha:* *tihfir* *taht-ha:*
 そして-女持ち主-DEF-パン焼きがま 言うIMPR.2SG-〜に-彼女 掘るIMPF.2SG ~の下-それ
 「そして、パン焼きがまの持ち主の女にはその下を掘るように言いなさい」 [I-212]

- (21) *a:na:* *kθur* ʔli:-ja: *l-xi:r*
 私 増えるPERF.3SGM ~にとって-私 DEF-富
 「私は富が増えた」 [I-211]

- (22) *w-d-dinja:* *mʕa:w* *ma:-jijbaʕ* *min-ha:* *hadd*
 そして-DEF-世界 ~ものだ NEG-満腹するIMPF.3SGM ~に-それ 誰も
 「そして、世間というものは誰もこれに満足することがないものだ」 [I-215]

- (23) *w-wxajj-na:* *xða:* *fi:-h* *ir-rabb ma:* ʔʕa:
 そして-兄・弟-私たちの 取るPERF.3SGM ~の中-彼 DEF-主 関係詞 与えるPERF.3SGM
 「そして、我らが登場人物（文字通りには兄もしくは弟）はといえば、主が自ら与えたものを彼において取り上げた（『彼は死んだ』もしくは『彼は意識を失った』こと

を表す定型表現) 」 [I-122]

- (24) w-bi:ru: hatʃt fi:-h ka:tib jaqbaðʕ
 そして-事務所 置く PERF.3SGM ~の中に-それ 秘書 取る IMPF.3SGM
- fi-l-kra:wa:t
 アスペクト標識²-DEF-賃料

「そして、事務所はといえば、彼はそこに、家賃を取り立てる秘書を置いた」 [I-214]

これまでは、主題を、動詞文の中心である動詞との結びつきが強い主語と動詞補語（直接・間接目的語）との関連において捉えてきたが、そればかりでなく、文の周縁的な要素が主題化された例もある。(25) では、主題は、主語そのものではなく、主語 ru:h 《魂（女性名詞）》に接尾された属格人称接辞と再述関係にある。

- (25) hu:wa tʃalʃit ru:h-u:
 彼 昇る PERF.3SGF 魂SGF-彼の

「彼はといえば、その魂は昇っていった」 [I-140]

さらに、次の (26) では、主題が再述関係を持つのは、前置詞 fi:- 《~の中で》の補語である名詞 bla:d 《国》に接尾された属格人称接辞である。

- (26) a:na: ma:-jitʃadda:-ʃ iðʕ-ðʕulm fi:-bla:d-i:
 私 NEG-通る IMPF.3SGM-MOD DEF-不正SGM の中-国-私の

「わが国では不正はまかりならん」 [I-126]

(25) や (26) のような例の存在から、動詞文においては、動詞と直接関係を結ぶという点で動詞に対して一次的に結びついている主語や動詞補語（直接・間接目的語）のみならず、これらの一次的要素を修飾しているという点で動詞に二次的に結びついている要素も主題化されると考えることができる。これらを踏まえて、主題を持つ動詞文の構造を一般化すれば (27) のようになろう。

- (27) T C [V S / COMP / X]

ただし、Xは評言内の二次的な要素を表す。またTはVにおいては定動詞の中に含まれる屈折辞、Sの場合は人称代名詞、COMPの場合は対格・属格人称接辞、Xの場合は属格人称接辞と再述関係にある。

² このアスペクト標識はそもそも前置詞であるが、ここでは進行・習慣相を表示している。詳しくは熊切 (2012) を参照されたい。

2.5. 二重の主題化

これまででは、主題が1つの例を扱ってきたが、2つ現れる例も存在する。こうした二重の主題を持つ文は、構造的には2種類のものがあると考えられる。1つはある文において統語的機能の異なる2つの要素が主題化されているものであり、これを並列型と名付ける。もう1つは、ある主題と結びついている評言自体がさらに主題と評言とに別れる場合であり、ちょうど主題文の中にもう1つの主題文が入れ子のように入っているものである。一見、2つの主題が並んでいるように見えるが、実際には2つの主題の統語的階層は異なる。本稿ではこれを入れ子型と呼ぶことにする。

まず、並列型として、次の2例をあげる。(28) では、動詞 *nhuṭʔ* の主語である1人称単数の人称代名詞 *a:na:* 《私》と、前置詞補語 *-ha:* として再述される名詞句 *kull ha:za lli: niksib-ha:* *la:zim* *nhuṭʔ* *ha:* とが二重に主題化されている。

(28) *a:na:* **kull** **ha:za** *lli:* *niksib-ha:* *la:zim* **nhuṭʔ**
私 すべて ものSGF 関係詞 手に入れるIMPF.1SG-それを 必ず 置くIMPF.1SG
ʕli:-ha: *tʔ-tʔa:biʕ mta:ʕ-i:*
～に-それSGF DEF-印 ～の-私

「私は自分が手に入れたすべてのものに、必ず自分の焼印を入れる」 [I-123]

次の (29) も主語である2人称単数の人称代名詞 *inti:* 《あなた》と、名詞句 *ha-l-xidma* *ha:ði:ja* という2つの主題を持つ。

(29) *inti:* **ha-l-xidma** **ha:ði:ja** *la:* **thibb**
あなた この-DEF-仕事SGF このSGF NEG ～したいIMPF.2SG
la: *tifhim-ha:* *la:* *tistaʕrif* *bi:-ha:*
NEG 理解するIMPF.2SG-それSGF NEG 認めるIMPF.2SG ～について-それSGF

「あなたはこの仕事を理解しようともそれについて認めようもしない」 [II-218]

なお、この (29) においては、第2の主題である名詞句が動詞 *thibb* に続く2つの動詞の後で人称接辞 *-ha:* として2度再述されているが、はじめの動詞では *tifhim* そのものに接尾され、次の動詞 *tistaʕrif* では、この動詞に結びついた前置詞 *b-* に接辞されている。動詞に接尾されるのは対格人称接辞の系列、前置詞や名詞には属格の系列であるため、厳密に言えば、ここで再述されている2つの *-ha:* は、統語的には異なる機能を持つ（前掲の表1を参照されたい）。

入れ子型については、その例をあげる前に、その一般的な構造 (30) を示す。

(30) T C [T' C']

(30) は、見かけ上は主題並列型に見えるがそうではなく、Tがその主題となっている評言Cの中にさらにもうひとつの主題T'と評言C'が含まれているという入れ子状の構造となっている。

次の(31a)では、a:na: 《私》がTに、b'a:b'a: 《私の父》がT'に当たり、その構造を示すと(31b)のように、b'a:b'a: 《私の父》を主題とする文全体が、主題 a:na: 《私》に対する評言となっている。

- (31)a. a:na: b'a:b'a: r'a:-hu: yu:l
私 私の父 ~のだ-彼 グール
「私はパパがグール（魔物）なのよ」 [I-030]
- b. T (a:na:) C [T' (b'a:b'a:) C' (r'a:-hu: yu:l)]
c. T' (b'a:b'a:) C' (r'a:-hu: yu:l)
d. T (a:na:) C (b'a:b'a: r'a:-hu: yu:l)

ここで、この(31a)について説明すると、これはモダリティ辞 r'a:- に主格人称接辞が接尾したものが述部となった文であり、この r'a:- と主格人称接辞との組み合わせは、その直後の補文を新情報として提示する機能をもつ(熊切 2013)。(31a)では、r'a:- と主格人称接辞との組み合わせの直後にくる名詞文 “yu:l” 「(彼は)グールだ」が新情報として提示されている。このモダリティ辞 r'a:- の現れる文では、これに付加される主格人称接辞は主題と再述関係にあり(熊切 2017)、この例においてこのモダリティ文の主題となっているのは b'a:b'a: 《私の父》である。したがって、b'a:b'a: を主題T'とするならば、r'a:-hu: 以下は評言C'となる(T'とC'における再述関係を(31c)の太字で示した)。次にTである a:na: について述べると、この b'a:b'a: というのは特殊な形式であり、通常 bu: 《父》では、他の普通名詞と同じく3人称単数男性の場合には bu:-h 《彼の父》、2人称単数の場合には bu:-k 《あなたの父》というように属格人称接辞によって所有者が表示されるのに対して、1人称単数では、規則的な形式である bu:-ja: よりも、人称接辞が明示されない b'a:b'a: が用いられる。したがって、この文全体の主題であるTすなわち a:na: は、1人称単数を意味的に含む b'a:b'a: において再述されていると考えることができる。この再述関係を太字で示したのが(31d)である。

次の(32a)では、it'-t'ufla 《その少女》がTに、in-nu:m 《眠り》がT'に当たり、その構造を(32b)のように表すことができる。

- (32)a. it^f-t^fufla in-nu:m ma:-kahhal-f ʕi:n-ha: li:lit-ha:
 DEF-少女 DEF-眠りSGM NEG-眉墨をつけるPERF.3SGM-MOD 目-彼女 夜-その
 「その夜、娘はまんじりともしなかった (Marçais et Guïga [1958-1961: 3384]に
 したがえば文字通りには『眠りが彼女の目に眉墨をつけなかった』)」 [I-161]
- b. T (it^f-t^fufla) C [T' (in-nu:m) C' (ma:-kahhal-f ʕi:n-ha: li:lit-ha:)]
 c. T (it^f-t^fufla) T (in-nu:m) C (ma:-kahhal-f ʕi:n-ha: li:lit-ha:)
 d. T' (in-nu:m) C' (ma:-kahhal-f ʕi:n-ha: li:lit-ha:)
 e. T (it^f-t^fufla) C (in-nu:m ma:-kahhal-f ʕi:n-ha: li:lit-ha:)

(32a) については、入れ子型ではなく、(32c) のように動詞目的語 (ʕi:n) に付された3人称単数女性の属格人称接辞 (-ha:) と再述関係にある it^f-t^fufla と主語 (in-nu:m) とが二重に主題化された並列型とも解釈することもできる。しかし、[in-nu:m ma:-kahhal-f ʕi:n-属格人称接辞] は、付加される属格人称接辞に応じて《～はまんじりともせず夜を明かした》という意味を表す定型表現であり、hika:ja:t al-sarwi: のはじめの2巻に現れた他の2例 (I-27, II-145) でも、常に in-nu:m が主題化された語順で現れる ((32d) でこの定型表現内の再述関係を太字で示した) 。この点を考慮すると、[in-nu:m ma:-kahhal-f ʕi:n-属格人称接辞] はひとかたまりの統語的単位であり、it^f-t^fufla は (32e) で示したようにこの統語的単位全体にかかる形で主題化されているとみるほうが適当である。

3. チュニス方言の主題化の特徴

ここでは前節の記述を踏まえてチュニス方言の主題化の特徴をまとめる。

3.1. チュニス方言の主題の統語的特徴の検討

まず、(11) で述べた、チュニス方言の主題の統語的特徴であるが、前節で扱ったいずれの例においても、名詞文は (15)、動詞文は (27) にまとめたように、その主題は、評言の前に現れ、また評言内において人称接辞、人称代名詞、動詞の屈折辞のいずれかとして再述されている。したがって、(11) の統語的特徴は妥当なものだと考えられる。

3.2. 主題の定性

主題とは、聞き手が知っているか、知っているとは期待されているか、何らかの点で予測が可能な情報を表す要素であり (Dinkins 2009: 494)、定・不定の対立でいえば、定である要素だと考えられる。本稿で扱った例を見ると、1つの例外を除けば、いずれも定の名詞句か人称詞、指示詞であり、この点ではこれらを主題とする上で矛盾はない。ただ1つの例外とは、(24) であり、ここでは主題となる bi:ru: 《事務所》が不定となっている。しかしながら、資料を検討すると、この例は「彼は自分のために事務所を設置し」という意味の文に後続しており、(24) の bi:ru: は定冠詞はないものの既知の情報であると解釈す

ることができる。

3.3. 主題化の「自由」

さらに、文の中のどのような要素が主題化されうるかについて検討すると、名詞文においては述部名詞・主語名詞を修飾する要素が、動詞文においては、動詞に対して一次的な構成要素である主語や動詞補語（直接・間接目的語）のみならず、これらの要素を修飾するという点でより低い階層の要素も主題化されていた。すなわち、名詞文と動詞文に含まれるさまざまな要素がかなり「自由」に主題化されうると考えてよいだろう（ただし、名詞文については主語名詞・述語名詞を修飾するより低い階層の要素が主題となった例はなかったが、こうした例がまったくあり得ないのかどうかは現在のところ不明である）。ここでいう主題化の「自由」とは、より厳密に言うならば、ある要素が統語的役割の違い、階層の違いに関わりなく主題化されうるということである。

主題化のこの自由はまた、並列型の二重の主題化においても観察することができる。ここでは、それぞれ異なる統語的役割を持つ2つの要素が、主題という統語的領域においてはともに同じ資格で並ぶのである。さらに (29) は、対格と属格という統語的な役割の異なる2系列の人称接辞が同一の主題として主題化された例だが、これは主題化においては対格と属格の境界が無化されるためだとみなすことができよう。

主題化は、統語的な役割ばかりでなく、形態的な違いも無化する。すなわち、入れ子型として扱った (31) では、b'a:b'a: は形態的には1人称単数とは何の関係もないにも関わらず、《私の父》という意味ゆえに1人称単数人称詞 a:na: として主題化されたのである。

したがって、この言語における主題は、評言の前にあり、評言内において再述されているかぎり、統語的・形態的な制約から自由であると考えることができる。

3.4. 主題のスコープ

主題の持つこうした「自由」は、主題化された要素が、評言に先行して、統語的機能を示すいかなる標識もなく最初に現れるということに由来していると考えられる。発話においては、はじめに主題が明らかにされて、その後、評言において再述されることによってその統語的役割が示されるのであるが、これを言い換えれば、主題の提示ののちにこれと再述関係を持つ評言が後から形成されるということである。つまり、主題化という用語から想定されるような、主題が評言から引き出されるという関係ではなく、むしろその逆に、主題が統語的に評言を規定しているのである。

このような規定性は言い換えれば、主題の統語的なスコープが評言全体に及ぶものであるということであるが、この特徴がより強く現れているのは入れ子型で扱った (31) と (32) の2例と、次の (33) である。

(33) **b'a:b'a:** d-dinja: f'angra w-hu:wa myarfit-ha:
 私の父 DEF-世界SGF 鍋 そして-彼 おたま-それSGF

「私の父はといえば、彼はなんでも知っている（文字通りには『世界は鍋で、彼はそのおたま』）」 [I-037]

この例においては、主題は **b'a:b'a:**、評言は接続詞で結ばれた2つの名詞文と解釈できるが、主題が再述されているのは2番目の名詞文のみである。すなわち、最初の名詞文は主題とは関係を持たないのだが、この2つの名詞文は全体で1つの意味を表しているため、主題のスコープ内に丸ごと収まることになったと考えられる。

3.5. 主題と主観性

チュニス方言の主題には、3.1.と3.2.において述べたように統語的な2特徴と定性という制約があるものの、そのいっぽうでは、この制約の範囲内にある限りにおいては、他の統語的・形態的な制約を受けることなく、さまざまな要素が自由に主題となりうること、そして主題のスコープが評言全体に及ぶことも明らかになった。後者の主題のスコープについていえば、主題のもつ機能からすれば当然のことであるが、主題になりうる要素の多様性はこの言語における主題化の顕著な特徴であると考えられる。そこで、これがこの言語においてどのような意味を持つのかを考察してみたい。

2.2.で触れたように主題化とは、通常の文の構造を主題と評言という2項からなる構造へと変換することであるが、この変換そのものの動機となっているのは、既知の情報を未知の情報と区別して聞き手に提示することにより、より効果的に情報を伝達したいという話者の主観である。この主観において、何を既知の情報とみなすか、そして複数ある既知の情報のうちどれを主題化するか判断がなされる。この主観的判断は、話者と聞き手の関係、発話の状況などの語用論的要因によって多様に変わりうるものであるが、この判断を言語化した形式である主題文においても、その多様性に対応するだけの自由が言語構造上、許容されている必要がある。この自由が言語的にどのように構造化されるかは、ここでは一般化することはできないが、少なくともチュニス方言においては、主題化される要素の制約の弱さとして現れていると考えられよう。

4. 結論と課題

本稿では、チュニス方言のさまざまな主題文の記述を行い、主題化を主題が評言の前に出るという語順の特徴と、主題が評言内において人称要素として再述されるという特徴の2つの統語的特徴をまとめた。さらに、チュニス方言の主題化においては、統語的・形態的な制約がなくさまざまな要素が自由に主題となりうるという特徴があることを指摘した。この特徴について、主題化の背景にある話者の主観性と関連させて論じ、これが話者の主観的判断の多様性に言語的に対応するものであると結論づけた。

本稿においては主として統語論的側面から主題化についての議論を行い、どのような名詞が主題になりやすいかといった主題のヒエラルキーや、この言語において主題がもつさまざまな談話的機能については詳細には論じなかった。これらに関しては今後の課題としたい。また「3.5. 主題と主観性」で述べた、主題が文全体にスコープを持つ性質と、主題化のもつ主観的な特徴は、この言語のモダリティ表現の構造にも通じるものであり、これを総合的に記述していくことも今後の課題としたい。

略号

C : 評言 COMP : 動詞補語 DEF : 定冠詞 IMPF : 未完了形
IMPR : 命令形 M/F : 男性・女性 MOD : モダリティ辞 NEG : 否定辞
P : 述部 PERF : 完了形 S : 主語 SG/PL : 単数・複数 T : 主題
1/2/3 : 1人称、2人称、3人称 《 》 : 《語・定型句・構文の意味》
「 」 : 「文の意味」 [] : 句・文・構文の構造 - : 形態素境界

参考文献

- Dinkins, James (2009) Topic and Comment. In: Kees Versteegh, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich and Andrzej Zaborski (eds.) *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics, Vol. IV*, 494-501. Leiden/Boston: Brill.
- Gibson, Maik (2009) Tunis Arabic. In: Kees Versteegh, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich and Andrzej Zaborski (eds.) *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics, Vol. IV*, 563-571. Leiden/Boston: Brill.
- Hava, J. G. (2001) *Arabic English Dictionary : Al-Faraid al-Durriyyah*. New Dehli: Goodword Books.
- 熊切拓 (2012) 「アラビア語チュニス方言のアスペクトを表示する前置詞: その統語的特徴と意味」 『東京大学言語学論集』 32: 37-65.
- Kumakiri, Taku (2013) “Epistemic Modality and Conditional Sentence: On the Presentative Particle of an Arabic Dialect of Tunis (Tunisia)”. 『東京大学言語学論集』 33: 155-173.
- 熊切拓 (2017) 「アラビア語チュニス方言のモダリティ表現と主題人称」 『日本言語学会第155回大会予稿集』 69-74. 日本言語学会.
- Marçais, William et Guïga, Abderrahmân (1958-1961) *Textes arabes de Takroûna. II. Glossaire*. Paris: Bibliothèque de L'École des Langues Orientales Vivantes.
- 野田尚志 (1994) 「日本語とスペイン語の主題化」 『言語研究』 105: 32-53.

Topicalization in the Arabic Dialect of Tunis

KUMAKIRI Taku
cyberbbn@gmail.com

Keywords: Arabic, Maghreb dialects, syntax, topicalization, word order

Abstract

The Arabic dialect of Tunis is one of the Maghreb dialects spoken in North Africa. This paper primarily attempts to provide an extensive description of the Tunis Arabic topic sentences by analyzing those obtained from the collection of stories titled *ħika:ja:t al-ħarwi:*. First, we demonstrate that topicalized noun phrases exhibit the following two syntactic features: (i) they appear in the sentence initial position, and (ii) a resumptive pronominal element that corresponds to the topicalized noun phrase appears in the comment part of the sentence. Secondly, we show that various types of sentence elements can be topicalized in this language (i.e., syntactic constraints on topicalizable elements are weak). We discuss this syntactic “freedom” in connection with the speaker’s subjectivity in choosing which sentence elements to topicalize.

(くまきり・たく)